

スポーツ留学序論～大学教育、 グローバル人材教育への意義

根本真吾

Introduction of a brand-new way of Overseas Education utilizing US
intercollegiate sports system

-Impact on Japanese university education and the current global human
resource development

I. はじめに

2005年から2008年まで4年連続で留学生の減少が続いたとされる文部科学省の調査が示すように海外に出たがらない若者の内向き化傾向が懸念されていた中、2010年6月にユニクロ、楽天は英語を社内公用語にすると発表し世間に衝撃を与えた。その後、グローバル市場への展開を目指す企業が次々にグローバルな人材を採用しようという動きが活発になってきた。この動きと並行し、政府も積極的に日本人の海外留学、グローバル人材の育成を支援する方針や施策を打ち出してきている。そして、今度は、そのグローバル人材を送り出す側である教育機関が政府・民間の動きに対応する番である。

グローバル人材育成の典型的な方法が留学制度であるが、従来から大学は、交換留学などの制度を実施してきた。しかし、それは限られた生徒のための制度が多いのが現状である。今後はより多くの生徒をグローバル人材に育成していくためには、より門戸を広げた多様化したニーズに対応するプログラムが求められる。

多様化するニーズに対応する留学制度の一つが、留学時に勉強をしながらスポーツを行うことで、語学力を修得しながら大学運動部に入ってスポーツをする、スポーツ留学である。

近年、野球界では毎年のように日本人メジャーリーガーが誕生し、日本人のメジャーリーグ選手がいることが当たり前になっている。サッカーでも長友佑

都や長谷部誠、本田圭佑等のような選手たちが海外のクラブで活躍し、ゴルフ界では、石川遼、宮里藍、テニス界では錦織圭のような選手が世界的大会で結果を出し、報道されている。このようにスポーツ界では、世界で活躍する選手は年々増え、それを見て育つ少年少女にとっては、日本人が海外でプレイをするということがごく自然なこととなっている。

一般的に若者の間に海外志向が薄れ内向き傾向にあるといわれるが、スポーツを行う若者たちにとっては、トップ選手の影響を受け目は外に向いている。海外が憧れの間から、目標、さらには、トレーニングの場になりつつある。スポーツのために海外に出るということを当たり前のように感じる若者が、今後さらに増加していくと予想される。

本稿では、スポーツに特化した留学事業を8年以上に渡り行ってきた実績、経験を元に、野球を中心としたアメリカスポーツ界の仕組み、スポーツ留学の概略、過去の事例を考察し、グローバル人材教育、日本の大学教育とのかかわりを論じていく。

Ⅱ. グローバル人材を求める動き

実は、「若者の内向き志向」と懸念されていた傾向にも少しずつ、変化が始まっている。スポーツ留学の概略の前に、グローバル化へ向かっていく世の中の流れと現在の留学事情について触れてみたい。

2000年代後半から、留学者数の鈍化、減少、若者の内向き化ということが論じられたが、そのことは同時に新たな成長を描こうとする政府に危機感を与えようである。2010年4月に文部科学省と経済産業省が共同で事務局を務める産学人材育成パートナーシップ、グローバル人材育成委員会から「産学官でグローバル人材の育成を」というグローバル人材育成の必要性を強く訴える報告書が発表された。

この報告書では産学官一体となってグローバル人材を育成していくことを訴えている。大学・産業界・政府に対する提言の項では、期待されている取組として次の4項目を掲げた。

1. 産学官連携による大学でのグローバル人材の育成
2. 産学官での日本人の送り出し支援
3. 大学の人材グローバル化
4. 企業・日本社会の人材グローバル化

その中の2、「産学官での日本人の送り出し支援」の項では、①産学官による海外留学・海外学習の機会の提供、サポート、その例として「海外大学との連携による交換留学プログラム」、「海外での学習プログラム」、「海外インターンシッププログラムの提供」、と「留学」を具体的な方策として掲げている。

この報告書発表の約2ヵ月後の2010年6月に、ユニクロと楽天が続けて英語を社内公用語にするという発表をし、世間を驚かせた。グローバル市場進出、拡大を企む他の日本企業も、グローバルトレーニングや、英語力・国際経験のある人材の採用等、教育・採用の面で、同じようなグローバル人事戦略をとる企業が増加した。

日本経済新聞2011年8月19日夕刊は1面に「海外留学脚光再び」というタイトルの記事を掲載。2008年まで4年連続で減少していた海外留学生在が2009年から再び上昇に転じ、2010年は約18万3000人で前年に比べ18%増加しているという。(同記事、数字は留学ジャーナルの推計より)。また同新聞電子版には「日本人留学生求人活況。説明参加企業5割増」(2011年7月27日付)、「海外留学テコ入れ、奨学金制度も充実文科省12年度概算要求」(2011年9月30日付)と2011年7月から9月の間、3ヶ月連続でグローバル人材関連の記事が掲載されている。こうした記事からも昨今、海外留学、グローバル人材育成・獲得に政府、企業が積極的になってきたこと、そのことに日本経済新聞社側も注目しているという傾向が伺える。それでは日本の大学はこのグローバル人材への動きにどのように対応しているのだろうか。

日本の大学は、ずっと以前から各大学、独自の留学制度を設置、実施している。しかしそれは古くから行われている留学制度である。ここで、従来から採られている留学制度を「従来型」と定義すると、従来型では、学部への編入に

限定し、語学学校への留学は大学公認の留学とは認めないものが多い。英語力も一定の基準をクリアした一部の生徒が試験を通して交換留学生となり、留学するという限られた生徒のための制度というのが一般的である。参加への基準が厳しく、帰国子女等、もともと英語力がある生徒に有利な、一般的な生徒にとって狭き門の制度である。このような従来型の留学制度を採用している大学はまだまだ主流だといえる。

一方で、近年、国際関係の学部、コースを設立し、学部、コースとして、生徒に積極的に留学を奨める傾向がでてきている。その従来型とは異なる、積極的かつ柔軟に、より広き門で生徒に留学を推奨する新しいタイプの留学制度の例を3校取り上げてみる。

■亜細亜大学

http://www.asia-u.ac.jp/inter_ex/auap/index.html

亜細亜大国際関係学部ではアメリカプログラム（AUAP）という5ヶ月間アメリカの大学・大学付属語学学校に行き、英語を学び、最大16単位を認定するという留学制度がある。

費用 98万円

■専修大学

http://www.senshu-u.ac.jp/ie_oe/iecenter/oeprogram/mroeprogram.html

学部にかかわらず、参加でき、単位を最大16単位認定するという制度。3ヶ月間の語学研修のあと、現地でインターンシップというプログラムもある。

費用 82万円～109万円

■北九州市立大学

外国語英米学科（他学科）

http://www.kitakyu-u.ac.jp/campus/student_affairs/study/bbs.html

3ヶ月のプログラム。ESLという英語集中プログラムで英語習得に努める。単

2012年1月 根本真吾：スポーツ留学序論～大学教育、グローバル人材教育への意義
位認定あり。

費用 69万6000円 (= 8700ドル)* * …… 1ドル = 80円計算

これらはほんの一部に過ぎない。以前からたくさんの大学ではアメリカや各国の大学へ生徒を送る交換留学制度を持っているが、外国語大学のように外国語の修得を目的とする大学ではない、総合大学が、上記のような学部をあげての留学、まとまった数の生徒を大学付属の語学学校に編入させるプログラムが推進されてきているのが最近の傾向であろう。この傾向は、2011年に入ってから官民のグローバル育成への積極姿勢、特に企業のグローバル人材への採用シフトに呼応してより加速していくことは大いに予想される。

つまりこれまでは狭き門だった留学制度が、より多くの生徒が参加できるようになってきている。学部全体で制度を推し進めるような亜細亜大学のような例も現れてきた。

しかし、それには弊害もある。筆者が提携しているアメリカの大学にも毎年、日本のいくつかの大学から、学生が留学してくる。人数は、20人から場合により100人以上が一つの受入校に行く。そうやって人数が多くなると、アクティビティが一緒になったり、同じようなカリキュラムにまとめられたり、日本からの大学の生徒だけのプログラムになりがちになる。つまり、クラスは日本人それも同じ学校からのメンバーのみで、他の留学生との交流が無い、ということが起こりやすくなる。実際にある学校のプログラムに参加した生徒は、「アメリカ各地への訪問や、日本ではできないいろいろな経験をして楽しかったが、どこに行くのも何をするにも日本人と一緒にだった。」という。この大学のプログラムは、学年全員が留学をするという仕組みなので、仕組み上そうならざるを得ない、とのことだ。大学をあげての留学はグローバル人材育成にとって素晴らしい制度だが、一度に同じ受入先大学に留学するという仕組みは、どうしても日本人同士の固まりを助長することになる。

このように、日本の大学が、今後、よりグローバル教育に力を入れ、学校として留学を推進し、より多くの生徒が留学するような傾向になってくると、生徒のニーズも多様化し、それに対応する制度が必要となってくる。その多様化

に対応する一つの案がスポーツ留学である。また、スポーツに限らない、生徒の才能を生かした、多様化するニーズに対応したプログラムの登場も、今後望まれるようになるだろう。

Ⅲ. スポーツ留学、アメリカの大学スポーツとは

ここからスポーツ留学、及びその受け入れ先であるアメリカのスポーツ大学界について説明をしていく。本稿ではスポーツ留学の定義を、アメリカの大学に入って大学の運動部でスポーツを続けることと限定的に定義することとする。

大学の運動部のことを英語では intercollegiate sports と呼び、それに対し、サークルは intramural sports と呼ぶが、ここで言うアメリカの大学でのスポーツ留学は、サークル = intramural sports のことではなく、intercollegiate sports 日本で言う体育会運動部に入ることである。また、MLB、NBA、NFL、NHL の4大メジャーといわれるプロリーグやその傘下のマイナーリーグ、あるいは独立系のプロフェッショナルリーグに入ることを指すものではない。

「スポーツ留学」と聞いて、人によっては、プロリーグそのものに入ることを想像したりする方もいるが、それはここでの定義のみならず、本来のスポーツ留学という意味にもふさわしくない。

特に近年、「我々とエージェント契約すれば、プロになれる」あるいは「エージェントと契約しなければプロに入れない」というような宣伝文句で選手と契約を結ぼうとする一部のエージェントや留学会社がいる。しかしながら、プロのリーグというのは、日米問わず、方法論にのっとって入れるものでも、企業が斡旋して入る所でもない。日本のプロ野球に選手として入ることを就職斡旋してくれる会社が無いように、アメリカのMLB組織でもそのように、会社の力で入団がきまるといようなことはない。また、競技に専念したいという理由から、高卒後、アメリカの大学より独立リーグを志望する日本人選手がいる。しかし、実際には大学スポーツが盛んなアメリカでは大学生選手としてプレイする方が競技に専念できる環境が整っている。大学スポーツと独立リーグを比較するとその差は大きな違いがある。

一番の違いは、スポーツの機会である。大学は学生ビザでの滞在となるので、年間を通して滞在できる。野球でいえば、夏にサマーリーグに参加すると計算した場合、年間100試合以上プレイできるチャンスや大学内グラウンドで常に練習できる環境が整えられている。一方、独立リーグの場合、シーズンは比較的短く、途中で解雇される可能性がある。シーズン途中で、経営難で球団自体がなくなってしまうというケースもアメリカ独立リーグではよくあることである。またプロとはいえ、大学の施設のように自由に使っている練習場が確保されているというチームは意外と少ない。次にビザの問題がある。外国人である日本人は、独立リーグでプレイする場合、労働ビザが必要となる。大学生であれば学生ビザであるが、労働ビザは一般的にはほぼ100%発給される学生ビザに比べ、取得への難易度が上がる。またビザの取得は球団が行う。時間や手間、経費がかかるビザを取得することは、選手にとってはマイナスとなり、契約のハードルが上がる。契約中の選手であっても、よほどの際立った成績を残さないと次の契約更新のたびに解雇の恐怖が常につきまとうこととなる。

大学生は野球以外の時間は勉強をすることにより、体系的に英語、学問を学べる。また学業をしっかりしなければ試合に出られないというルールもあるので文武両道が仕組みとして組み込まれている。さらに生活リズムの安定、身分の安定がある。それに対し、独立リーグは日本のように毎日練習や試合があるわけではない。アメリカ人でさえ、他で働き口を確保してプレイをする独立リーガーも一人や二人ではない。学校に所属して勉強をしているということでもない限り、きちんとした英語力も身につけにくい。少なくとも企業からは、その期間は空白期間とみなされがちになる。表1は、野球留学を例に、大学野球と独立リーグの比較をまとめたものである。プレイヤーとして、さらに上のレベルで続ける、スカウトへの露出の機会という点でいえば、日本の高校を卒業してすぐにアメリカの独立リーグに行くというのは得策ではない、といえる。

【表1】日本人にとってのアメリカ大学野球とアメリカ独立リーグの比較表

	アメリカ大学野球	アメリカ独立リーグ
練習場所	チームのホームグラウンド。たいていの場合、グラウンドやウエイトルーム等は選手が自由に使える環境が整っている。	チームホームグラウンドが一定していないことが多く、グラウンドやウエイトルーム等が自由に使えない、あるいは、遠く離れている場合がある。
ビザ	学生ビザ。	就労ビザ。就労ビザは取得にお金がかかるので球団が避け、契約を見合わせる場合がある。
周りの選手	高卒後に野球を続けたい場合はほとんど大学に行く。アメリカには社会人やきちんとしたクラブチーム等受入先も他にない。高卒後独立リーグに行くというアメリカ人は極めて少ない。この年代を求めメジャーのスカウトは大学リーグをチェックする。	大学を卒業してから行く所という考え。23歳以上の選手が大半。アメリカには社会人やきちんとしたクラブチームがないため、大学卒業後でも野球続けたい場合に独立リーグに行くことが多い。他に働きながらという選手も少なくない。
2010年ドラフト指名選手数*	1042名。	1名。
英語	定期的、体系的な勉強をすることで英語力がつく。卒業すれば学士。	学校に通う等定期的な学習の場を求めることが必要。
身分	学生。	身分は不安定。解雇や球団解散は常に付きまとう。

本表は筆者根本の独自の調査により作成

*mlb.com 内ドラフトページを根本自身が数えたもの

IV. アメリカ大学スポーツの特徴

「アメリカの大学でスポーツをする」ことを「スポーツ留学」として定義したが、アメリカの大学の部活動は、日本とは異なった特徴がある。スポーツ留学の一例であるアメリカの大学スポーツについて、ここでも野球を例に1～3にその特徴を挙げてみる。

1. シーズン制

アメリカの大学スポーツはシーズン制を敷いている。野球の公式戦シーズンは春（だいたい2～5月）1回のみ。日本だと春季と秋季があるが、アメリカは春1回。それでも2～5月の間に40～50試合超の試合を行う。

アメリカの新学期にあたる秋は、プロ野球でいう春季キャンプのような時期

2012年1月 根本真吾：スポーツ留学序論～大学教育、グローバル人材教育への意義
となる。春の公式戦に向け練習試合を重ねメンバーを絞り込んでいく。その練習試合も紅白戦含め30試合あるいはそれ以上行う部もあり、試合を通して鍛えていくという方法を取る。6月～8月にあたる夏の時期は、部活動は行われない。厳密に言うと、規定でチームとしての活動をしてはいけないことになっている。有志による選手だけの自主練であれば、認められているが、監督やコーチが指導したり、指示を出したりすることは認められていない。

その間、選手たちは、学校や大学連盟とは別の組織が主催し、各地域で行われているサマーリーグに参加する。サマーリーグは現役の大学選手が参加して40～50試合が行われる本格的なものである。アメリカ東海岸ニューイングランド地方で行われるケープコッドリーグのように全米から大学生のトップクラスのメンバーが招待されて行われるため、ファンやスカウトも大勢駆けつけるという有名なリーグもある。ケープコッドクラスでなくても、各地には地元の大学生を中心にメンバーを構成したチームによるリーグが行われ、プロのスカウトも訪問することがある。アメリカの大学では公式戦シーズンは春季一度だけだが、春季に1チーム50試合近くの試合を行う。その公式戦で結果を残すと、次のサマーリーグから招待されることがある。ゲームは春の公式戦同様、ホーム&アウェイ方式で、アウェイ時にはバスに揺られ、チームメイトとホテルに泊まる、というマイナーリーグのような体験をする。

2007年に大学サマーリーグに出場し、43試合で3割を超える活躍を見せ、その秋にトライアウトから横浜ベイスターズにドラフト指名された関口雄大という選手がいる。(関口選手の現在の所属は北海道日本ハムファイターズ) 関口選手は「まったくデータもない、みたこともない、しかも日本に比べてかなり投げ方も、球の回転も変則なピッチャーと入れ替わり立ち代わり対戦しなければならず大変だったが、その中で結果を出すことができ、どんなピッチャーが来ても対応できるという自信がついた。」とサマーリーグでの体験を語っていた。

2. 選手資格ルール日本の大学での公式戦出場経験の有無

基本的なルールとして、日本の大学の硬式野球部で4年間公式戦に出場した経験があると、アメリカの4年制大学では、ロースターメンバー(=公式戦メンバー)には入れない。つまり公式戦でプレイできない。また、日本の大学の硬式野球部で2年間公式戦に出場した経験があると、アメリカの2年制大学では、プレイできない。つまり、アメリカの大学には公式戦プレイ資格に関してはルールがある。簡単に言うと、最大でプレイできる期間は2年制大であれば、2年間。4年制大であれば、4年間と定められている。ある選手が、1試合でも公式戦に出場した場合は、1年とカウントされ、その選手がプレイできる年数は2年制大であれば残り1年、4年制大であれば、残り3年となる。

よく、「日本の大学で部活を4年間やり、卒業後に今度はアメリカの大学の部活に挑戦しようと思っていますが、どこかないでしょうか?」と相談されるが、日本で4年間公式戦に出ていると、ルール上、アメリカでは公式戦に出場できないということになる。日本で公式戦に出ていなければ、部活に所属していてもかまわない。

日本の大学を休学して、アメリカの大学に野球留学するという場合も、この公式戦出場経験の有無により、プレイできる年数が決まってくる。日本の大学において、1、2年で公式戦にでてしまうと、アメリカの2年制大でプレイすることは難しくなる。サマーリーグは大学連盟の主催ではないので、この選手資格ルールが適用されないというのが一般的だ。前述の関口選手は、滋賀大でプレイし、4年次に米大学サマーリーグに参加したという事例が過去にはある。実は当時、関口選手はアメリカの長期留学を考え、私のところに相談に来たが、選手資格ルールのこともあり、サマーリーグに方向転換した。

つまりアメリカ以外の国であっても、日本の大学での公式戦出場経験があれば、1試合でも1年とカウントされる。またNCAA傘下の4年制大では、大学付属英語学校では学部生と認められず、部活動に参加することは認められない。

3. 少人数制

野球部に入るのは簡単ではない。たいていチームには人数枠というものがある。秋の時点で50～60人。さらに絞り込んで春の公式戦メンバー＝ロースターは25～35人ぐらいになる。

秋の枠からロースターに絞られるにあたり、おもに、「ロースター」「練習生」「カット」という、この3段階に分かれる。「カット」は部に帯同できないことを意味する。学校によっては、「練習生」という段階がないところもある。つまりカットされると練習生にも残れず、部活動に参加することもできない。実際は練習生として残れる仕組みを持つ部のほうが少数派である。このカットという仕組み・習慣はアメリカの高校の部活動でも一般的である。米プロバスケットボールリーグ、NBAの伝説的なスーパースター、マイケル・ジョーダンが、高校時代、バスケットボール部からカットされ悔しい思いをし、以降それをバネに練習し、スーパースターまで登りつめた、という話はバスケットボールファンの間では有名である。あのジョーダンでもカットされる、そのような仕組みが一般的である。日本の部活動とは大きく異なる、アメリカの部活動の大きな特徴の一つである。

カットといわれる人数選定の具体的な方法は、地域・学校・競技によってもさまざまだが、野球で言うと一般的に第一段階が秋（8月又は9月～）、第二段階が春（1月～）で、第一段階の秋シーズンで練習、紅白戦、対外試合を行い、本格シーズンに向けてロースターの絞り込みをする。その選ばれた選手というのがロースターとなる。

この秋のシーズンは、大リーグ、プロ野球の春季キャンプのようなものと考えれば分かりやすい。秋のある時期を定め、それ以降は選ばれた選手しか進めなくなる。カットはチームによっては、秋シーズン開幕1ヶ月を過ぎてから徐々に行うところもあれば、秋シーズン最後迄、秋のメンバー全員で練習し、秋シーズン終了時、11月頃カット通告を行う部もある。

アメリカでは、選手が部活の門をたたけば入れるというのではなく、基本的にはチームのコーチ・監督が選手をスカウトする。選手が来るのを待ってい

るという考えではなく、コーチが積極的に選手をスカウトしチームを編成していくという考え方である。

なぜ少人数制か

アメリカの大学の運動部はなぜ少人数なのか。それには理由ある。一つには予算上の問題から。アメリカの大学運動部は、その点ではプロ並である。野球を例にすると、アメリカの大学野球部ではロースターの選手に用具が支給され、自分で買う必要はない。チームにより差異はあるが、グラブ、バットを除く、たいていの用具（=ユニフォーム、帽子、アンダーシャツ、ソックス、スウェット、ウィンドブレーカー、ジャージ、Tシャツ、バッグ、シューズ）、さらに遠征費、ホテル代、遠征時の食事代等、これら全て学校が負担し、選手が払う部費というものはない。

また、学校によって選手のグラウンドでの成績により、返済不要の奨学金が支給される場合がある。人数を最低人数に絞るのもこうした予算が関係しているからだ。したがって、部員をある程度の人数に絞らないことには、予算内で運営できなくなる。もう一つにはコーチという職業が確立していることに起因する。コーチ=監督は教員でなく、コーチという職業を本業にしている、自分のチームの成績が、自分の職・キャリアに直結する。自分の指導に合うような、できるだけ良い選手を部に入れたがるのは当然のことといえる。

こうした少人数制での選手選定において、鍵となるのは、選手のパフォーマンス以外の要素も関連してくる。特に学業面である。スポーツが盛んなアメリカでは「学生の本分は学業と」、学業をしっかり奨励されるよう各連盟（大学、高校）の規定で定められている。つまり一定以上の成績を取っていないと、試合に出場停止の措置が下される。NCAAのディビジョンI（1部）ではその基準が最も厳しく規定されている。したがって、奨学金を受けた選手が、学業不振のために試合に出られないということがあると、その奨学金枠の分、非常にもったいないことをした、とコーチは考える。もし全く同じ評価のプレイヤーが二人いた場合、高校時代、学業の成績の良い選手をとる傾向にある。

V. スポーツ留学の意義

これまで見てきたように、アメリカの大学運動部に入るということは、アメリカ人にとってもそうであるように、外国人である日本人にとっては、部活動に入ろうと思えば入れる日本の環境と異なり、特殊なことであるという認識が必要である。

特殊さゆえにさまざまな労力が伴う場合があるスポーツ留学であるが、その分、その機会を生かす生徒には、それに見合った十分な意義が見出せる可能性を持っている。具体的にスポーツ留学の意義としては、次の5点が挙げられる。

1. 英語実践機会の増加と英語学習に効果的な環境・強制力
2. 言葉を超えたつながりをもたらす場の確保・目的を持った留学生活による中身の濃い留学・経験
3. 選択肢の提供
4. グローバル人材育成に有効な工夫ポイントに合致
5. より多くの広い層への機会の提供

1. 英語実践機会の増加と英語学習に効果的な環境・強制力

スポーツ留学は部活動をすることで、何もしない場合と比べ、単純に英語に触れる量を圧倒的に増やす。特に、大学付属語学学校では、朝から夜まで授業を行っているという所は極めて少ない。多くは午前又は午後の半日だけとなる。長い場合でも9時から3時ぐらい迄であろう。仮に3時迄だとしても、放課後の時間は十分ある。そこで何もしないのと、英語に触れ、実際に使うということの差の積み重ねは、長期的に見ると大きな違いになる。一般留学生向けには、受入学校側でも英語の実践機会を増やすべく、毎週あるいは毎日のように、アクティビティを一生懸命企画しているが、日本人の留学生に占める割合が多いと、実践や英語に触れるという意義は薄れる。それに対して、アメリカ人の中で部活動を行うスポーツ留学では、スポーツを通じて、アメリカ人の生きた英語を聞き、教室で覚えた言葉を使う場を得られるという英語力向上に効

率的な有意義な時間となる。

また英語の授業と異なり、運動部は英語修得に効果的な強制的に英語を使わざるを得ない環境に身をおくことになる。特にチームスポーツの部活動の場合、競技やポジションによっては積極的にコミュニケーションしないとどうしようもないことがわかる。自ら英語を積極的に使わなければならないと自覚をせざるを得ない。また、ちょっとしたことが伝わらなかつたり、理解できなかつたりということが頻繁に起こる。授業ではない、日常の場面で、小さな挫折が繰り返し訪れる。毎日毎日、あるいは分刻みで自らを奮い立たせる場面に遭遇し、そのたびに、モチベーションが上がることだろう。モチベーションでなく、フラストレーションがたまることもあるだろう。しかし、そのフラストレーションこそが、英語を上達させる大きなきっかけ、モチベーションとなる。部活がない生活でもフラストレーションや英語を上達させるモチベーションアップの機会はあるだろう。しかし、毎日、ネイティブと一緒にいるという機会は恋人同士でも作り出しにくいだろう。部活動はそれを強制的に作り出す。

2. 言葉を超えたつながりをもたらす場の確保・目的を持った留学生生活による 中身の濃い留学・経験

部活動は、単なる英語に触れる時間が増えるということではない。現地アメリカ人との深い交流ができる場をもたらしてくれる。アメリカ人とのより深い交流というのは、考えている以上に、留学生にとって現実ではなかなか難しい。授業だけの付き合いでも、なかなか時間がかかる。それがスポーツという共通言語により、文化、言葉、国籍の壁を取り払ってくれる。運動部に参加するスポーツ留学では、「場」がすでにあり、そこにはじめの段階から輪の中に入るという、一般の留学生からするとうらやましい、時間と労力を費やして得られる環境・状態をスポーツ留学生は、「スポーツ」を通じて、手に入れることができる。

そして、部活に入った以上、選手には「チームのメンバーに残る」「チーム

2012年1月 根本真吾：スポーツ留学序論～大学教育、グローバル人材教育への意義として、勝利を目指す」という真剣勝負がある。アメリカは必ずしもレベルがどの学校でも高いわけではないが、裾野が広い。一定以上の選手が多数いる。つまり気を抜かず真剣勝負が強いられる。

成長には挫折は必要だが、挫折を演出、計画することは難しい。一方、スポーツに挫折はつきものだ。これまでスポーツで鍛えられてきた選手であれば、スポーツでの挫折は経験済みで、困難でもきちんと受入れ、克服していける資質を持っていることが期待できる。

それに加え、同じ志を持つアメリカ人と目的をともにし、アメリカ人と一緒になって喜怒哀楽を分かち合う機会が得られる。このような経験を共有することは簡単には得られない貴重な機会である。

3. 選択肢の提供

大学の中に留学を目指す生徒たちが増えてくると、団体とは異なる、留学内容のニーズが多様化していく。団体から一線を引き、日本人とも距離を保ってアメリカ生活を体験したいという留学生が出てくる。また自分の強みを生かした留学をしたいという生徒へのニーズにも対応していく必要がある。

全員が同じ場所、同じ活動という、画一的な従来の留学制度から、生徒が各自の持つ才能を生かしたよりバラエティに富んだ選択肢の留学スタイルを提供していくことが、グローバル人材の育成には必要だ。スポーツ留学はその新たな選択肢の一つとなる。

4. グローバル人材育成に有効な工夫ポイントに合致

Ⅱで、「産学人材育成パートナーシップ、グローバル人材育成委員会～産学官でグローバル人材の育成を」という報告書の一部を紹介したが、同報告書内の1、「産学官連携による大学でのグローバル人材の育成」には、「産学官連携による大学でのグローバル人材の育成の詳細において、有効な工夫（ポイント）」として7つのポイントが挙げられている。

①産業界の経営幹部・実務者によるグローバルビジネスの実態についての「生

声」による講義で学習意欲を高める。

- ②外国語による一般教養科目や専門科目
- ③予習を前提とした授業や参加型学習手法により好奇心を高める。
- ④多様な価値観や考え方、その背景にある文化や歴史を知識として習得させる。
- ⑤日本や日本人が海外の人々からどのように捉えられているのか、客観的な視点で見直す契機を与える。
- ⑥海外インターンシップや交換留学プログラム等により、④⑤等で学習したことを経験から実感させる。
- ⑦多様なバックグラウンドを持つ学生チームが課題解決に向けて協力共同することで想像力等を養う。

この中の④～⑦は、多様な価値観文化背景のある、アメリカ、外国人からなるアメリカの大学運動部チームで④、日本人の捉えられ方を理解、経験しながら⑤、⑥、多様なバックグラウンドを持つ選手たちと勝利に向かって、一丸となって頑張っていく⑦、スポーツ留学の特徴と合致する。

5. より多くの広い層への機会の提供

従来から、各大学では留学制度実施している。従来型の交換留学プログラムは、一般的に応募に英語力を求められる。これだけで応募の門が狭められている。

24時間日本語環境の中で、留学資格を得る英語力を得ることは、実は容易ではない。留学資格試験に通るために、日本国内の英語学校に通うことを間接的に強いるような本末転倒な事態も起こりえる。門戸の狭さは、初めから自分には海外には関係ないと考えたり、交換留学の道をすぐにあきらめたりする生徒を生むことになる。

回復傾向にあるものの、ただでさえ、内向きといわれる中で、グローバル人材を増やしていくという新しい流れを作るのであれば、積極的にチャレンジする機会を与え、さらには、「今、英語力が無くとも、多くの生徒に海外で挑戦

2012年1月 根本真吾：スポーツ留学序論～大学教育、グローバル人材教育への意義
できる」と生徒をその気にさせるより炬移送への働きかけと、環境づくりが必要である。

スポーツ留学の特徴の一つは、部活動に励んできた選手は、これまでやってきたスポーツをコミュニケーション手段として、強みとして、世界で利用することができるというものだ。

これまで海外を自分のことと考えなかった層にリーチすることで、グローバルを意識し、挑戦を志す生徒の層が広がることであろう。

VI. スポーツ留学経験者の声

さらに、具体的なイメージを持っていただくために、野球留学を実際に体験し、その後商社マンとしてアメリカ勤務で活躍している山田貴弘さんに伺った話を紹介する。

■野球留学を経験し、商社マンになった山田貴弘君への一問一答。

Q就職活動で、野球留学の話が面接官に大いに興味を持ってもらえたと聞きましたが、具体的には？

A就職活動において、現在求めている人物像にチャレンジ精神と適応能力、主体性が重視されている企業が非常に多いです。それに対し就活生がすべきことは企業の求めている所に焦点を当て印象と説得力を持って臨む事が必要とされます。正直、野球留学はそれにドンピシャで適合していると思います。

具体的には、

- ・野球留学自体めずらしく、反応がよかった。印象に残せた。
- ・実践的な語学力を評価して頂けた。
- ・面接官が興味を持ってくれる確率が非常に高く、落とし込む質問を頂き、そこで留学時で起きた事象が非常にうけた。(例：寮で同室になったボブサップ級の黒人さんとワンピースの話で盛り上がったこと等々)
- ・そもそも一つのことに執着し徹底する行動自体に興味をもって頂けた。
- ・他の就活生と比較したときに経験の差別化を与えられた。

Qアメリカ野球時代のこと、楽しかったこと。つらかったことは？

A楽しかったことは一つは異国の文化を知れたこと。それは語学留学や就職とはまた違った、リアルなアメリカを肌で感じることができたこと（日本人コミュニティのない生活）。そして野球面では上達している感覚が短期間で味わえたこと。つらかったことは、個人的なことになりますが怪我をしてしまったこと、それによって起こった負のスパイラルです。

Qそもそもなぜアメリカで野球をしようと思ったのか？

A理由は3つあります。

1. 単純にアメリカへの憧れ。それは野球の聖地として。
2. 英語を普通に学ぶことが苦手であったため。英語の必要性は感じていましたが、勉強といった形式を拒みたかった。結果成功だったと思っておりま。
3. 後悔を残さないため。就職する前に可能性のあること全てにチャレンジしたかった。

Q留学がもたらしたものは？

Aこれは、本当にはかり知れません。留学チャンスを頂ける大学3年まではアメリカで野球をすること、ましてや就労ビザをもらい働ける等考えてもみませんでした。これを機に人生が変わったと言っても言い過ぎではないと思っております。

野球留学では野球然り、生き方然り、どうやってアプローチをすれば今のベストが出せるかをなんとなく掴むことが出来たような気がしました。留学を機に人生の方向性が変わり、支えていただいた方々にはほんとうに感謝しています。＜終＞

山田さんは日本大学在学中の2007年春から、1年間休学し、野球留学をした。休学留学を終えて帰国した2008年も、米大学サマーリーグに出場、2ヶ月間という短期で野球留学をした。帰国後の就職活動では、その特殊な経験により、複数社より内定をもらい、専門商社に就職。2009年の入社一年目からアメリカに赴任し、現在も活躍をしている。スポーツ留学の成功例の一つである。

Ⅶ. 日本の大学とスポーツ留学

では、実際に、グローバル教育としてのスポーツ留学を大学教育に取り入れるにはどうしたらいいか。スポーツ留学を大学教育に取り入れる具体的な方法について考えてみる。

スポーツ留学を大学教育に取り入れるパターンは二つある。

1. スポーツ留学時を単位として認定しない。
 2. スポーツ留学時を単位として認定する。
1. 単位として認定しない場合は、単純に日本の大学を休学して私費留学することである。学校側が制度として掲げる場合、一般的な休学より、納める授業料が安くなるあるいは免除になるというものが必要となる。単位が認定されないとすると、卒業まで1年ないし2年が余分にかかり、生徒の制度への参加の障壁は上がると予想される。
2. アメリカの大学運動部公式メンバーとしてプレイする場合には、連盟のルールに従い、前述のとおり、フルタイムの学生として一定以上の講義を履修し、かつ一定以上の成績を上げることが求められる。

したがって、一定以上の成績を修めた講義分を日本の大学での単位に認定することは技術的に十分可能なことと思われる。

そして生徒にとってより安心なことは先に、ある特定の規定、たとえば、C以上またはD以上であれば、どのクラスであっても、たとえ語学プログラムであっても、単位認定するという明確なガイドラインを作り、交換留学生に明示しておくことだ。特に、語学プログラム過程でも、単位が認められるということであれば、生徒にとってはスポーツ留学プログラムへの参加への障壁を大きく低くすることになる。

全て英語で進められる語学プログラムの講義は、日本での英語の授業相当、特に語学修得と言う点ではそれ以上の意義と内容であり、加えて部活動や海外生活そのものは、机上で学ぶことのできない異文化学習の一環と捉えられるべきである。

現地アメリカ人向けに設定された部活動をするための学業成績の基準をクリアすることは、単位認定をするのに十分値すると評価されるべきである。より柔軟な大学側の姿勢が望まれる。

Ⅷ スポーツ留学を大学制度として取り入れる場合の大学としてのメリット・デメリット

今回は、スポーツ留学のメリット・デメリットを運動部の視点も含めあげてみる。

メリット

まずメリットとしては、英語力がそれほどでない状況でもグローバル人材育成時代に合致したグローバル教育の体験ができる。異国での生活は積極性、自主性が求められ、異文化で生活することにより、より広いものの考え方ができることが期待される。留学決定当初では英語力がそれほどでもなくとも、留学という目標ができ、かつ現地での生活により、英語力の飛躍的向上が期待される。

特に部活動では、通常語学プログラム生では先生以外にはなかなか知り合う機会のない、ネイティブの生徒と知り合う貴重な機会が得られる。部活動という環境により、英語力向上はもとより、比較的短期間でもチームメイトとの友情関係を築けるといふ独特の機会があるのは意義のところでも述べたとおりである。また、メンバー入りした場合に、公式戦出場のためには、一定以上の成績を修めなければならず、学習を余儀なくされる。これらは教育機関として、今後求められるグローバル人材を輩出することで日本の成長戦略に貢献できる。

画一的でない、他とは違った体験を積んだ山田さんのような、企業から評価されるグローバル人材をより多く輩出することでグローバル人材輩出大学としてのイメージも高まる。

では日本の大学の運動部側としてはどうか。運動部としては、これは選手に実戦経験を積ませる絶好のチャンスとなる。100名を超える大所帯の運動部で

2012年1月 根本真吾：スポーツ留学序論～大学教育、グローバル人材教育への意義は、試合に出られる選手の数は限られてくる。

アメリカの大学でメンバー入りした場合、野球では約50試合、バスケットボールでは約30試合、さらに野球では、秋のシーズンも20～30の練習試合と、日本以上の試合経験をつめる可能性がある。結果重視のアメリカでは、いかに結果を出すかという必死さ、本番に強いメンタリティーが鍛えられる。

プロ野球球団が、若手選手を半年から1年MLBのマイナーリーグ球団に送り、実戦経験を積ませるように、選手育成を目的として留学を活用することができる。また出場機会が少なかった3年生、4年生に、出場経験を与えるという功労をねぎらう意味での活用も可能である。(ただし、アメリカの部で受け入れられるためには一定以上の実力が必要となる)

デメリット・課題

デメリット・課題としては、

1. 日本の大学で留学時の単位換算の協力が得られなければ、1年またはそれ以上、留年する可能性がある。
2. 学生の支払う費用負担が増える。留学で発生するおもな費用は、米大学の学費、滞在費（ホームステイ、寮等）、食費、教科書代、大学関連費（体育施設使用料等）、またビザ申請にかかわる費用がある。手続き・現地連絡を業者に依頼する場合は、留学手続き費用が発生する。

なおアメリカでの単位を認めた交換留学を行う大学は、生徒に日本の大学に学費を納めさせ、その分の一部を交換先の大学に納めている場合がある。

その場合でも、学費以外の部分は、生徒の負担となる。特待生で、学費等免除、一部免除を受けている選手にとっては、通常の学費分がもめられることと予想される。

3. 交換留学制度は、制度の趣旨からも、異国という環境でやっていく点からも、通常生徒が自ら立候補するものであり、スポーツ留学制度においても、同様である。その場合、チームのエースや4番等主力級の選手が

立候補した際、問題が生じる可能性がある。そうならないように、事前に主力はスポーツ留学に対象外、あるいは、帰ってきたら、メンバーに入れない、というような不安を生徒が持つてしまう可能性は否定できない。

はじめから応募対象者を「応募時点において、運動部で、公式戦メンバーに入っていないもの」とするのは一つの案である。しかしながら、その場合、競技によっては、日本で公式戦メンバーに入れない選手のレベルでは、アメリカの受入先でもメンバーに入れない可能性・リスクがあることを本人が理解・同意をして留学をすることが望ましい。

4. 4番目は、時期の問題である。通常の留学では、新学期にあたる秋学期（8月中旬）から留学させ、野球シーズンが終わる春学期（1－5月）で1シーズンを終える。4学期生の学校であれば、秋学期の9月中旬からスタートし、冬学期（1－5月）、春学期（3－6月）で終了する。つまり秋（8月又は9月）に開始し、5月又は6月に終了する。これが1アカデミックイヤーというアメリカのカレンダーとなる。

野球やソフトボール等春にシーズンのあるスポーツであれば、秋はオープン戦や練習試合が行われ、秋の成績で、春の公式戦メンバーを絞っていく。

秋でのパフォーマンスが振るわない場合は、春の公式メンバーからは容赦なく外れる。メンバーから外れた選手は、練習にも参加できない。たまに練習生という形でチーム帯同を認められる場合があるが、チームの方針、予算、そしてその時のコーチの評価によるので確約されにくい。例え春にメンバーから外れた場合でも、学校を追い出されることはないので、その点は心配要らないが、その場合は、春学期は勉強だけとなる。そうなるとトレーニングの観点からは日本の大学の運動部指導者にとっては、満足のいかないものとなりうる。その場合、メンバーに残れなかったら、早期終了とし、1月から帰国させるということを留学者、日米の大学留学担当、日米の部活動責任者の間で事前に決めておくという方法はある。その場合、学業面では、前期後期の半期分の単位として認定し、4月から日本の大学に復学させることができるので、大きな問

2012年1月 根本真吾：スポーツ留学序論～大学教育、グローバル人材教育への意義
題はないと思われる。

IX. 日本の大学でスポーツ留学を取り入れている事例

2011年9月、桜美林大学の硬式野球部の選手2名がアメリカの大学に留学し、野球チームに入ったというニュースが、同校のホームページに最新情報として掲載されていた。

http://www.obirin.ac.jp/topics/campus/year_2011/0926_2.html

記事によると、桜美林大学野球部の選手が同大の留学制度の一環として、コロラド州立大学に留学し、同大の野球部に入った。スポーツ留学の実践例が掲載されている。

同ページでは野球部とあるものの、「ラムズは2010 NCBA (The National Club Baseball Association)」とあり、正式な4年制大の連盟であるNCAA (全米大学体育連盟)の傘下ではない。その野球部は実際、硬式野球部ではなく、サークルあるいはクラブチームの類に分類される。つまり、コロラド州立大自体に野球部が無い大学である。

NCAA傘下の4年制大の野球部の場合、英語力が求められる。英語力がなく、学部生になれず、大学付属語学学校生の身分であるとNCAA (全米大学体育連盟)のルール上、野球部に入って活動することができない。これは、日本人がほとんど必ずといっていいほど直面する問題である。

桜美林大学の場合、受入校のコロラド州立大の野球部が、NCAA傘下でなく、クラブチーム運営だったため、野球部に入って活動することができている。これが、バスケットボールや陸上、水泳等10ある他のNCAA傘下の運動部だと、英語力が一定点に達してないと参加できなくなり、参加者への門がかなり狭められてくる。

ホームページからはそのようなことは見当たらないが、もしこの留学制度に野球部の選手が応募する際に、野球をやること、スポーツ留学が条件となって参加をしたならば、かなりリスクがあり、問題につながる恐れも大いにあった。

一方、今回は、たまたま野球部の選手が、野球ができるという期待を抱かずに、本留学プログラムに参加し、その提携校がたまたま、このような4年制大としては特殊な組織をもっていたため、野球部に入れたというのであれば、まったく問題はない。ちなみに、同校のGOプログラムという留学プログラムは、1学期のみの長さという留学プログラムだそうだ。その点も、運動部に入る条件交渉の際に足かせになる要素になりがちである。

もし留学制度を推進する日本の学校側が、これらのことを熟知していないと、まだまだ受入れ先ですらも、完全に理解、浸透していないスポーツ留学をさせようとしても、スポーツの部分が早い段階で実現されない、つまりプレイが認められないということになり、スポーツを期待していた生徒には大きな落胆を与えることになるので、注意が必要である。

一方、一部の学校で、英語を学びながら、運動部に参加できる学校もごくわずかだが存在する。留学生でも問題なくプレイできるというスポーツ留学について、情報の共有、体制作りが望まれる。はじめからスポーツ留学ということで、運動部の生徒たちをひきつけ、彼らの留学を実現させるのであれば、日本の大学の留学担当は、スポーツ留学へのより深い知識と理解、調査が必要になり、さらには受入れ先のアメリカの大学、運動部責任者へも啓蒙が必要となってくるだろう。

X. 最後に

私自身、大学時代に英語学校に留学した経験を有する。英語習得のためにアメリカの大学付属の英語学校に通うのは一つの効果的な方法だが、結論から言って、ネイティブと友達になって英語に接する時間を増やさないと英語は上達しない。少しは上達するが、その速度はきわめて遅い。効果的に英語を習得する近道はネイティブと友達になることである。

私が通ったのは大学付属の英語学校で、クラスメイトに当然アメリカ人はおらず、日本人は多かった。その中での英語修得の大変さ、さらにアメリカ人と友達になることの大変さは自分自身、身を持って体験した。

住み慣れた土地から国を越え遠く離れた場所に住み、英語力も乏しい状況で、アメリカ人と友達になるのは、実は非常に難しいものである。実際、現地に行くと、アメリカ人はアメリカ人同士、同じアメリカ人でも、出身地や、肌の色で固まる傾向にある。その中に日本人が飛び込んでいくのは、無理が伴う。友達は無理やり作るものではない。

そのような状況の中、仲がよくなるきっかけをもたらしたのがスポーツだった。スポーツをやったり、スポーツのことを話したりして、アメリカ人と仲良くなり、後に今まで20年も続く親友もできた。彼とのきっかけも、陸上のスパイクを持っていた彼に、高校まで、陸上をやっていた私が話しかけたことだった。

「輪の中に入る」「向こう側に入る」は英語修得の秘訣である。

輪の中、向こう側とは「アメリカ人の輪の中」「アメリカ人の側」という意味である。スポーツはその輪の中に入る、向こう側に行くためのパスポートとなる。スポーツが好きな、スポーツをがんばってやってきた人は、そのパスポートをすでに持っている。これは、部活動を一生懸命やってきた選手みんなが持っている特権とさえいえる。

強みを生かすというのは、就職活動では繰り返し盛んに言われるフレーズである。自身の強みを発揮しながら、海外で異なる文化、言葉、習慣を持った他の国の選手たちと目的を共にし、協力・競争しあい、世界標準の考え方や姿勢を身につけていくという、グローバル人材育成が叫ばれる時代に適した教育方法の一つであり、今後多様化するニーズに合わせ、各校で採用していただきたい制度である。

運動部選手には、ぜひその特権、強みを生かし、パスポートを使ってアメリカスポーツ界にチャレンジし、英語を身につけ、他にはない経験をすることで、日本のグローバル化を背負って立つ人材になるよう、チャレンジしてほしいと願い、そのチャレンジの機会がより多くの人に得られるような環境を整え

られる手助けをしたいと考えている。

そのために、今後は、教育機関が活用して行く方法はないか、実践を重ねながら、研究を続け、新たな稿で検討していきたい。

参考資料

- ・ 日本経済新聞 2011年8月19日夕刊 1面 「海外留学脚光再び」
- ・ livedoor ニュース [ユニクロ] 新世界戦略 英語公用化…12年3月から (毎日新聞) - <http://ceron.jp/url/news.livedoor.com/article/detail/4845185/>
- ・ 日本経済新聞電子版 2011年7月27日付 「日本人留学生求人活況。説明参加企業5割増」
- ・ 日本経済新聞電子版 2011年9月30日付 「海外留学テコ入れ、奨学金制度も充実 文科省12年度概算要求」
- ・ 産学人材育成パートナーシップ、グローバル人材育成委員会「～産学官でグローバル人材の育成を～」2010年4月
- ・ 東洋経済新聞オンライン 2010/06/16 「三木谷浩史・楽天会長兼社長——英語ができない役員は2年後にクビにします」
<http://www.toyokeizai.net/business/interview/detail/AC/810ee47297d49033c2a4b43a0a5216e0/page/1/>
- ・ 亜細亜大学
http://www.asia-u.ac.jp/inter_ex/auap/index.html
- ・ 専修大学
http://www.senshu-u.ac.jp/ie_oe/iecenter/oeprogram/mroeprogram.html
- ・ 北九州市立大学 外国語英米学科 (他学科)
http://www.kitakyu-u.ac.jp/campus/student_affairs/study/bbs.html
- ・ 桜美林大学ホームページ
http://www.obirin.ac.jp/topics/campus/year_2011/0926_2.html